

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷四十第

行發日一月一年一十正大

マルクス氏餘剩價值説の評論	法學博士 田島 錦治
我邦の所得税を論ず	法學博士 神戸 正雄
奴隸制と賃労働制	法學博士 河上 肇
累進税の根據に就いて	法學博士 小川郷太郎
植民政策上より觀たる委任統治	法學博士 山本美越乃
小作制と小作法	法學博士 河田 嗣郎
社會の團結の減衰	文學士 高田 保馬
海運に於ける競争と獨占	法學士 小島昌太郎
舊尾張藩に於ける地割制度	農學士 奥 田 彥
財産税と國富統計	法學士 汐見 三郎
開城簿記の起源に就て	法學士 大森 研造

## 社會の團結の減衰

高田保馬

## 一 部分社會の錯綜

文化の發達は同時に部分社會の間斷無き分化を伴ふ。分化によりて成立したる多數の社會は相並び存立するが此共存の姿は云はゞ社會的錯綜 (Complication sociale) である。即ち一人は多數の社會に分屬するが各社會は其所屬員の範圍をそれぞれ異にする。此社會的錯綜の姿は立入りて分析する時、他の機會に於ても述べたるが如く、略ぼ次の如き形となる。

社會の分業状態を見るに、殆どすべての成員の仕事は無意識的協働の關係に立つ、此混亂せる間にありて、一部分の成員の仕事のみは整序せられ組織せられて意識的協働を形成して居る。所謂無政府状態にある産業界の中に工場的分業のみは一定の秩序を保つ。之と相似たる事が部分社會の錯綜の間にも認められる、原則として部分社會相互の間には別に何等認むべき組織も存在せず、多數の社會が雜然として相共存し相交又する。其間に於ける國家の統制作用の存在のことは姑く措く。たゞ若干の部分社會相互の間には一定の組織が保たれる。而してそれらは自體此組織の一

單位にてありながら、組織以外の他の社會と複雑なる關係に於て相交叉する。かゝる組織は屢説きたる事あるが如く、次の二の形態の何れかを取る。

第一形態は部分とも見るべき社會即ち大なる社會に對して從屬的地位に立つ諸の社會が非機能的に相並列する。此非機能的に並列すと云ふは大體に於て空間的に並列すと云ふも妨げぬ。例へば、國家、府縣、郡、町村等は一の組織をなせるものであるが、その中例へば一の縣に從屬する諸郡は並列すれども、その分立は決して機能の區別による事は無い、云はゞ地域の差異による。勞働組合が各地方に支部とも見るべき地方的團體より成立する姿も亦同様である。町村の農會郡縣の農會の關係の如き亦然り。然れども非機能的並列は必ずしも空間的並列に非ず。家族、氏族部族の組織の如き、云はゞ血緣的のものにして地緣的のものでは無い。此第一形態は基礎社會派生社會の何れにも通じて認めらるゝものであるが、特に基礎社會に於て重要な意義を有する。而して大小包攝の關係がたゞ一段に止まらず、多數の段階に亘るのを其特徴とする。第二形態においては從屬的地位に立つ諸社會が云はゞ機能的に分立する。即ち各社會の分立の根據が地域の差異血緣の差異に存せずして、機能の内容の差異に存する。種々なる佛教の各團體が相合一して全國的佛教團體を作る場合の如き、又は種々なる勞働組合——それは産業の線に沿ふと使用する道具の線に沿ふと論無く——が相合して全國內又は全地方内に於ける勞働團體を形成する場合の

如きこれである。此第二形態は、各社會の機能の内容が、嚴密に云へば相異なれりとは云ふものゝ、同範圍のものに屬するか、然らずして著しく範圍を異にするかによりて二分し得らるべしと雖も、今此點に論及せず。又從屬の地位にある社會と之を包攝すと一般に考へらるゝ大社會との體統的關係に就いては、別の機會に於て説明を加へたるが故に茲に省略する。

さて部分社會の不斷なる分化は此の如くにして社會の錯綜の程度を益々高めると共に、數多の社會の中には云はゞ同心異周の圓の如き關係に立ち、大社會に小社會を包攝して其間に體統の姿を呈するものがある。此二の事象が社會の團結を考ふる上に於て重要な意義を有すと信せられる一部の學者の考から見れば、或は部分社會の錯綜、或は部分社會の同心異周の組織が著しく社會の團結に寄與する。従ひてかゝる意見にのみ従ふ時は、部分社會の分化に伴ひて社會の結束は愈加はり來ると思はれる。此結論は果して理論的に正當のものなりや如何。この事を十分明ならしめむが爲には、眼を此社會の錯綜と其同心的組織の外更に廣き範圍に着ける必要があらう。

## 二 社會の團結變動の問題

文化の漸次に發達し部分社會の分化愈進むに連れて社會の團結は必ずや變動しよう。而も此變動の方向が或は其強度の増加にあるか其減衰にあるか。學者の見解は全く二に相分れ、或は其増

加を確信し或は其減衰を主張する。スメンサー、デュルケムは前者の一例にして、フアグソン、デ  
ンニエスの如きは後者に屬すと考へ得られる。此の如く見解の歸一する所なき問題に明確の答を  
與へむが爲には、一々の社會の團結と全體社會の團結とを區分して見なければならぬ。社會の定  
義を如何様に考へるにせよ、之をして十分學問的意義あらしめむが爲に、包括的なるものとす  
時は、種々なる社會がすべて其中に入り來る。所謂社會有機體論者の重に眼中に置きたりし全體  
社會と共に、心理學的社會學派の注目を怠らざる雑多の部分社會亦然り、進みてはタルドか常に社  
會の要素として考へ、ジンメル亦常に立論の出發點となせる個人的結合<sup>1)</sup> (die minimalen Bezieh-  
ung zwischen Menschen) も亦然り。從ひて社會の團結の變動の方向を論せむとするに當りては、  
これらの種々なるものについて、別々に考察を下す必要を見る。蓋し此等の種々なる種類のもの  
が其團結強度に於て皆同一方向の變動を辿るべしと信じ得べき何等の論據も存在せざるが故であ  
る。從ひて私は問題を二に分つ必要を認める。第一、種々なる部分社會、進みては雑多の個人的  
又は纖維的結合は、文化の發達するに伴ひ從ひて部分社會の分化に伴ひて、其團結増減の何れの  
方向をとるか。第二、同様なる過程に伴ひて、此等の部分社會と個人的結合とを包括する全體社  
會の團結は増加するや否や。

此等の問題の答解を與ふるに先だち、準備的考察を要するは團結の強度が何によりて測定せら

1) Simmel, Soziologie, S.20, 47ff.; Tarde, La Psychologie intermentale. Revue Internationale de Sociologie, 1901.

るゝかの問題である。この測定の標準は既に他の機會に於て述べたるが如く、デュルケムによりて、社會紐帶の『破らるゝ容易さ』と考へられて居る。私はこの考を根柢に於ては否認しない、たゞデュルケムの如く、之を以て一定の地域團體より脱離して生活する事の難易と解せず、社會を結束する紐帶が云はゞ反對の勢力たる分離の傾向によりて打ち克たれ、社會が分裂し消散する難易と見る。而もこれは、例へば一社會の成員の健康の程度を測定するに用ふる死亡率の大小の如く一種の消極的標準と見るべきものである。従ひて別に云はゞ積極的標準とも見るべきものを認むる事を妨げない。此例に於ては成員の體重の平均又は握力の平均と云ふが如きものに當る。社會の團結の云はゞ積極的標準は個人が社會の爲に盡す事の程度である。社會は常に其存續發展の爲に成員たる個人に對して或負擔を要し、個人は社會の爲に自己の利害を損ふもなほ此負擔に應ずる、此負擔はそれが自發的のものである限り個人の側より見る時、服従又は献身、忠順 (obedience, devotion, royalty) として考へられる。<sup>3)</sup> マクタイバは明に此事を説いて居る。謂へらく、『一の制度又は結社の力は之より利益をうくる個人に對する影響、拘束によりて測定せられる。それは人格の上に深き有效の要求を加ふる時に強く且つ永續的である、國家又は教會の方は其成員の献身の程度に應ずる、此程度は成員の人格が社會の存在と同一視せられる程度である』<sup>4)</sup> と言ふべきは、此献身又は社會の爲にする事の程度が個々の社會の團結強度の測定標準であるにして

2) Durkheim, op. cit. p. 120 et seq.

3) Laski, Studies in the Problem of Sovereignty, 1917. p. 11; Maciver, op. cit. p. 225; Simmel, Ueber sociale Differenzierung, S. 23.

4) Maciver, op. cit. p. 2 25.

も、全體社會のそれであり得ざる事である。此點は全體社會の團結の變動方向を論ずるに當り詳説したいと思ふ。

### 三 各團結の弛緩

全體社會の團結の強度が如何なる方向をとりて變動するかを考ふるに先だち、其内部に含まる一々の團結、即ちすべての部分社會並びに個人間の結合の強度が文化の發達に伴ひて増減何れの方角をとるかを明にしたいと思ふ。此點に關する結論のみを豫め述べれば、すべての團結は原則として漸次に弛緩しゆくべき運命を有する。個々の場合に就いて、又短き時期に就いては例外もあり得るが、茲には一般の方角をのみ考察する事勿論である。此弛緩の大體的傾向に關しては他の機會に於て評論したる事あるが故に、今私見の大略のみを述べる。

先づすべての統一的團結即ち部分社會に就いて考へる。人口の増加、文化の發達、分業の複雑化、社會的密度の増進と云ふが如き一聯の事象の進み行きに伴ひて部分社會の上に次の如き變動が生ずる。第一に注目すべきは同質性の減少である。例へば昔日の氏族又は部族と今日の國家とを比較せよ、成員の分化、並びに異なる社會の融合或は征服の結果として全成員を通ずる類似の程度は著しく失はれて居る。此事實が類似による愛着を減衰せしめたる事争ひ難い。第二、機能

の減少である。部分社會が間斷なく分化するに連れてすべての社會は漸次其機能を小分して一部を保つと云ふ姿とならなければならぬ。勿論新しき機能によりて新しき部分社會が成立する事も多い、けれども古き社會の機能も漸次に失はれ行く。他の事情にして一樣ならば、機能の増減は團結の強度を増減せしめる、此點よりしても部分社會の弛緩を信すべき理由がある。第三、社會の擴大即ち成員數の増加が同様の方向に影響する。人數の小なるほど社會が成員に課する負擔の分量大にして、従ひて社會の拘束、個人の奉仕は大ならざるを得ぬ。成員數の不斷なる増加はかくて自ら團結を弛緩せしめる。第四、外部の社會に對する關係も亦考慮せらるべきであらう。成員の分化、文化の發達に伴ひて外部の社會の成員との接觸が加はり其間に漸次に理解と親和との度が進む。此事からして内部の團結は其強さを弛める事とならなければならぬ。蓋し、内部の結合と外部に對する結合との相互比例するのは一般の原則と認め得られるからである。第五、社會の成員間に存する個人對個人の結合即ち纖維的の結合の變化がまた此統一的團結をして弛緩せしむる作用を有す、但し此點の説明はこれを後に譲らうと思ふ。恐らくば此他になほ列擧し得べきが、すべて此等の事情(そのすべて又は一部)によりて部分社會は皆漸次に弛緩の運命を辿り行く。基礎社會も派生社會も此點に變りはない。たゞ基礎社會にありては同質性の減少による影響を蒙る事特に強く、派生社會の團結強度の減衰は機能の小分に負ふ事格別に著しと云ふが如く、諸の

5) Simmel, Ueber sociale Differenzierung, 1890, S.23ff.



事情から来る影響の程度にそれ／＼差異あるだけである。嘗ては、これを結合定量の概念によりて説明し、結合の定量が益多くの部分社會に分配せらるゝが故に、各の團結は漸次に弛緩せざるを得ずと論じたが、今日なほ此見解をすてざれども、今詳論せず。以上の演繹的推論はまた之を事實の上に徵檢する事が出来る。例へば基礎社會に就いて見よ、團體的人格のみ認められて個人的人格の認められず、個人が云はゞ社會の中に吸収せられたりと考へらるゝ氏族の團結と今日の地方團體又は國家の團結との間には甚だしき差異がある。派生社會に就いて見るも、全體が目的にして部分たる成員が手段として考へらるゝ所の有機體的社會又は犠牲社會としてかの教會もギルドも存立してゐた、今日の教會、労働組合はこれに比ぶれば其結合遙に弛緩してゐる。更に進みて、株式會社の如き極めて一小部分の關係によりて團結し云はゞ全人格を保留して關與せしめざる社會の如きは以前に於て其成立の夢想だもせられざりし所であらう。

轉じて個人對個人の結合、即ち纖維的結合と名づくるものが文化の發達に伴ひて如何なる影響を蒙れるかを考へなければならぬ。これに就いて留意すべきは社會的密度の作用である。試みに大都市内部の市民間の個人的結合と農村の個人的結合とを比較せよ、何れが密にして何れが疎かかは容易に明白であらう。而してこれは重に、社會的密度の差異に負ふと考へられる。此密度が文化の發達に伴ひて加はるほど、私共は益々多くの人々と接觸しなければならぬと共に、其接觸する



かの統一的團結たる部分社會の上に看過し難き影響を及ぼすと思はれる。原則として、部分社會の全體即ち部分社會のものに對する結合、假に今全體的結合とも云ふべきものは成員相互の間に於ける結合の反映である。後者の程度によりて前者の程度も亦決定せらるゝと認められる。例へば國家そのものに對する團結は國民相互の間に於ける個人的結合の強きはゞ強きものと思ふ。此提言にして是認せられるとすれば、此の如き纖維的結合の減衰がかの部分社會の結合一般の上に及ぼす影響はまた之を弛緩せしむる事ではなくてはならぬ。

部分社會と云ふ統一的團結もまた個人對個人の結合たる纖維的結合も、共に文化の發達に伴うて弛緩する大勢を有する。然らば全體社會の團結は如何なる傾向を辿りて進むか。今の此問題に立入るに先だちなほ一點の明にし置くべきものがある。それは同心的組織の中にある數多の社會の團結相互の關係である。一般に數多の部分社會相互の間には私が他の機會に於て述べたるが如く消極的相關が存在し、從ひて新しき部分社會の成立は既存の部分社會の團結を弱からしめる。<sup>7)</sup> 然るに一派の學者の見解に従へば少くも同心的關係に立つ諸社會の結合にはかゝる消極的相關の存在せざるのみならず、寧ろ積極的相關がある。即ち大小各社會の團結は相助長するものにして例へば小社會の團結の緊密を加ふる事はやがてこれ大社會の緊密を加ふる事である。マク・ドゥガルは此點を最も明白に説いて居る。其見解によれば、『大なる集團が小なる集團を含む所の集

7) Coste, Le facteur population etc., Revue Internationale de Sociologie, 1901; Simmel, Ueber soziale Differenzierung, 1890, S.21 ff.; ditto, Soziologie, 1908, S.746 ff.; Tönnies, Gemeinschaft u. Gesellschaft, 1886, S. 45 ff.

8) 社會學原理一〇五五頁以下。社會學的研究二一五頁以下。

團の組織に相應する集團感情 (group sentiment) の體統』が形成せられる。各集團は擴大せられたる自我尊重の感情の對象となされる、而して小社會に對する感情は之を包括する所の大社會に對する感情の中に含まれる。』かくて家族、村、洲、國全體は常人にとりて此種の感情の調和的體統の對象を形づく。』而して其一方に對する感情は他方に對する感情を弱むるよりも寧ろ之を強める。例へば野蠻人の生活にありて、人々が自己の村以外の同部族内の村の防衛に當る事があるが、『此際彼は彼の部族的感情によりて動かさるゝのみならず、其村其家族に對する感情によりて動かされる。』『一般に一集團に對する愛着の感情の發達は他の集團に對する同様の感情の發達を妨げざるのみならず、寧ろ之を容易ならしめる。この事はその集團が全體部分として相關聯せる時に特に眞である。』<sup>9)</sup>要するに、各社會に對する愛着の感情は相損はざるのみならず、寧ろ一方に對する愛着の感情が他方に對するそれを助長し、同心的組織にある社會の場合には此助長の關係が特に明白なりと云ふのが其主張である。此主張はまた少くも、同心的組織を有する大小の諸社會の關係に關して、マクイバアによりても認められて居る。説いて云ふ、『大なる社會に對する私共の奉仕は重に小なる社會に對する奉仕を通して遂げられねばならぬ。』『最も親密なる小社會を實現せしむる事に於て、究局は自己を實現する事によりて、私共は人類を極度に實現せしめつゝある』<sup>10)</sup>若しマク・ドウガルのかゝる見解にして是認せらるべしとすれば、部分社會の分化は其團結を弛

9) Mc Dougall, Group Mind, 1920, p. 280-282; ditto, in the Sociological Review, April, 1912.

10) Maciver, Community, p. 331-333.

「緩せしむるに非ず、特に既存の社會と同心なる社會の成立はこれが結束を緊密ならしむと見なければならぬ。然れども、マク・ドウガルの主張には如何なる論據ありや。第一、少くも同心の組織に立つ諸社會に對する集團感情相互の間には體統的なる調和が存在してこれらが相害ふものに非すと云ふ事、第二、利己的傾向を抑壓して全體の爲にする結社の傾向は小社會に對する愛着によりてのみ養成せられる、それが漸次大社會に對する愛着、之を一體として考ふる理解に開展せられ行く、從ひて大社會に對する愛着は小社會に對するそれに相依存すと云ふ事、此二を出でざる様に見える。<sup>11)</sup>集團感情相互の間に少くも社會が同心の組織の中にある時、調和の存すと云ふ事は部分社會一般の集團感情間に相害ふ關係なしと云ふ事と相異なる。また此調和の存在は集團感情そのものを促進する事に非ず。加之、かゝる調和が如何にして存在し得るか不明にせられて居ない。スバルタ、クリイトに於ける國家の爲の家族の抑壓、支那に於ける家族の爲の國家團結の損耗、これらは此同心社會に對する愛着の間に調和の存在し得ざる事を明示するものと思はれる。次に、小社會に對して成員の總體を一全體として理解し之に對する愛着の感情を發達せしめてのみ大社會に對する愛着理解の可能なりと云ふ事は決して大小社會の團結が相害はずと云ふ論據とはならぬ。結社の傾向一般の形成、大社會の團結の成立が如何にして可能なるか、此等の發達論的考察は如何ともあれ、大小の同心の社會の共存せる場合に於て一方の團結又は一方の集團感情

11) Mc Dougal, op. cit. p. 80-81.

が地方のそれを害はずやと云ふ事が問題である。而して其相害ひ得る事はマク・ドウガル自らによりてすら認められて居る。<sup>12)</sup> 況んや、大社會に對する愛着が小社會に對するそれによりてのみ展開せらるゝとなす見解は容易に論證し難しと思はるゝをや。要するに、部分社會間、特に同心の諸社會間に團結の相互的助長又は調和が存すと認むる思想は科學的に論證せられたるものと云ふよりも、一の道德的要求が科學的主張の形を借りたるに過ぎぬ。

#### 四 全體社會の團結

デュルケムによれば、社會の發達せざる時代に於ては類似による連帶即ち機械的連帶によりて其統一が保たれ、漸次に發達して成員の分化著しきに及べば分業による連帶即ち有機的連帶が之を結束せしめる。若し、此有機的連帶が機械的連帶に取代る事が無いならば、益々異質化しゆく成員間の團結は弛緩し崩壊しゆく許りであらう。然るに此有機的連帶あるが爲に、社會は成員の分化分業の發達に伴ひてかへりて其團結を強める、原始低級の社會と今日の文明國の社會との間、團結強度の著しき差異あるはこれに由るのである。<sup>13)</sup> 文化の發達に伴ひて社會の團結の愈増加すると見るのはデュルケムのみに止らぬ。マクイバアも強く此點を主張して居る。其見解によれば、

12) *ibid.* p. 83-84.

13) Durkheim, *De la division du travail social*, social, *passim*.

社會性又は結社態(sociality)とは個性(individuality)とは相背反するのみに非ずして相並行するもの同一の事象の両面に外ならぬ。茲に社會性と云ふは結合してある姿、又は團結そのものであらう、従ひて社會化(socialisation)は(adaptation to social life in any form and any degree)を意味し、<sup>14)</sup>社會性の程度と云ふは個人が社會生活に根ざし又依存する程度を意味する。此意味に於ける社會性は個性が益々明確に形成せらるゝ程加はり行く、一般には人格が發達するに連れて人々は社會に獨立する程度が加はるゝと見らるゝが實は然らず。個性が益々完成せらるゝに伴ひて社會の個人に與ふる所多く、従ひて個人は社會に依存する所大に、又社會を通して遂行する所が多くなる。畢竟個性化と社會化とは同一過程を兩方面から見たものとすら云ひ得る。原始に於て社會性の程度小なりしと見るはたゞ人々の社會的關係が當時に於て單純なりしが故である。彼等は多くの社會に忠順を盡す代りに、たゞ一の社會にのみ之を捧げたに過ぎぬ。<sup>15)</sup>

此等の見解の是非に就いては後に論及したいと思ふ。たゞ注意すべきは如何にしてかゝる立論の可能なる餘地あるかと云ふ點である。前節に述べたるが如き事情によりて、殆どすべての社會并びに個人的結合は其強度が弱まる。固より一々の部分社會は生滅常ならず、従ひて例へば氏族は其或時期に生じ其或時期に滅びて居る、國家は進化の稍高き時期にのみ存立して居る。然らば一々の部分社會が原始より現代まで存續して其團結を失ひ來れりと見るべきに非ず、とは云へ、

14) Maciver, op. cit. p. 220.

15) ibid. p. 229.

16) ibid. p. 229-230.

相類似せる紐帶によりて結束せらるゝ諸の部分社會をば、發達の段階を隔てゝ比較する時、明に此事が認められる。此の如く一切の團結が其強度を失ひつゝある事の認めらるゝに拘はらず、文化の發達に伴ひて社會連帶、又は社會性の増進の主張し得らるゝもの、一に部分社會と全體社會との區別に存しなければならぬ。社會の團結の増加はたゞ全體社會に關してのみ立論し得る possible 餘地がある。デュルケム、マカイバアの見解も亦此全體社會に關するものである。

部分社會又は個人的結合の緊密なる事は必ずしも全體社會の緊密さを意味せず、又前者の弛緩は後者の弛緩を意味するものではない。全體社會は勿論部分社會と個人間の所謂纖維的結合の集積より成る、然れども前者の結束は決して後者の結束の算術的總計と見るべきものに非ず、後者の組み合せ方の中に存すと認め得られる。これ即ち部分社會も個人的結合も共に文化の發達に伴ひて弛緩する事明なるに拘はらず、全體社會の弛緩せずと考へられ、進みては緊密の度を加ふとまで信じ得らるゝ根據である。例へば各人が其家族又は其所屬の地方團體の爲に献身的忠順を捧ぐとせよ、而して國家又は其他の團結に對して盡すべき何等の餘力を残さずと想像せよ、家族又は地方團體と云ふが如き部分社會の團結は極度までに緊密となる、而もそれに拘はらず國家の團結は却りて著しく危くせらるゝのを思はなければならぬ。此の如く、部分社會の團結と全體社會の團結とは相平行するものに非ず(姑く個人間の纖維的團結のことを議論の外に置くとしても)。



これ前者が統一的結合にして後者は種々なる結合の錯綜に須つ自然の結果である。従ひて團結の強度の測定せらるべき標準が二者を通じて同一なるを得ざる事實がある。此標準には前に述べたるが如く消極的のものと、積極的のものを考へ得る。分離又は反對によりて破壊せられる事の難易は前者にして、成員たる個人が社會に捧ぐる忠順、献身の程度は後者である。前者に就いては後に論及する事として先づ後者に就いて考へる。例へば氏族が社會生活の殆ど一切を吸収し云はゞ全機能的社會として存在したる時にありて、而して個人の人格が氏族の人格の中に没入したるが如くにさへ見られたる時に於て、社會に對する個人の忠順は其極量に達する。此時氏族の範圍が全體社會の範圍として見らるゝ限り後者の團結は亦極點に達して居る。然るに、今假に支那の如き血族を重する國に於て或血縁團體例へば家族に對する各自の忠順が同様に極量に達したりとせよ、國家の範圍を以て劃らるゝ全體社會の團結は如何。若し社會一般に向ひて捧ぐる忠順が全體社會の結束を測定すべき標準なりとせば、此際それは最も緊密なりと見なければならぬ。然るに拘はらず、事實に於ける全體社會は極めて脆弱なる團結を保つに過ぎないであらう。これ前述の積極的標準が其用をなさざる所以である。

茲に於て、團結が分離の要素による破れ易さと云ふ消極的標準のみが残る。然るにマカイバアは此點に關して云ふ、『全體社會をれ自體は各結社の要求がその人格に對して與へ得る所のもの

に比例する程度に應じて強い。かくて各成員は各要求に調和的に従ひつゝ、生命の完全なる調和と完成とに到達する。』<sup>17)</sup>謂ふ心は、次の點に存する。即ち各部分社會はそれぞれ固有の機能を有する、然るに此固有の地位を越えたる範圍に立ち入り、成員に對して固有の機能に基く以上の要求を敢てする時、全體社會の結束は弱い、たゞ各部分社會がそれに應ずる機能を營みそれに基く丈の要求を成員の上に加ふる時その團結は鞏固である。かくて私の認むる所以外に新なる一標準が認めらるゝ譯であるが今私は此見方に従ふ事が出來ぬ。これによれば、社會内に數多の部分社會が成立し而して此等の部分社會はこれを成立せしめたる所以の共同利益のみを追求する時、即ち社會生活に關する機能主義フンクシヨニズムの實現せらるゝ時にのみ、全體社會の團結は鞏固であり得る。従ひて部分社會の分化し出でざる低級の社會に於ては全體社會の團結も亦弱く、文化の發達成員の分化著しく、且つ所謂 "Domination of associations over community" <sup>18)</sup>の現象なく部分的共同利益の存する所容易に部分社會が成立し得るに及べばかの團結愈強きを加ふる。然れども試みに最も鞏固なる結合を保ちたる氏族の存在したる時期を思ふ、此氏族の範圍を以て限られたる全體社會の團結は部分たる成員の獨立が認められざるまでに一有機的の如き觀を呈する、何所にも其分裂の危険は無い。然るに之を以て何故に今日の國家の範圍を以て限らるゝ全體社會然り時としては階級の争闘の爲に相分れむとするものよりも其結束弱しと考へざるべからざるか。私はそれに何等の理由をも發

17) Maciver, op. citp. 225.

18) ibid. p. 251.

見し得ない。かくて、所謂『部分社會の要求と用役とが比例する程度』と云ふものは全體社會の團結を測定すべき標準となるものに非ず。(註一)

(註一) 此點に用するマクイバア説の解釋は必ずしも正確なりとは断定し難い。マクイバアはたゞ各結社即ち各部分社會の吾人に與ふる用役とその吾人に賦課する要求とが比例する時に全體社會は最も強しと説くのみ。然らば此要求が用役に比例せずして過重なりとは如何なる意味を有するか。特定の二制度の要求(此要求と云ふは制度又は結社が成員に賦課する義務、拘束の如きものを總括して示すのである)例へば宗教的團體の要求の如きが他の要求を壓して最高のものとなり、全個人を吸収するが如き事ありと説かれる。而もかゝる一制度、一結社の要求の過大なるは如何なる事情の下に生ずるかと云ふに、『結社の各形態は社會的損失なくして他の結社により奪はれざる特有の地位と性質とを有する』に拘はらず、此各形態は其特有の紐帶もて全體社會の紐帶たらしめむと力める。例へば中世に於けるギルドはギルド員の權利と市民權とを混同し都市其物の地位を奪はむとした、國家は最屢かゝる企をする、而して他の結社の成立を妨げ所謂『全體社會に對する結社の支配』を行ふ。此場合に於ては支配的ならざる結社又は制度は成立し得ず、成立するも其用役に應ずる要求を個人に及ぼす事が出来ぬ事になるであらう。故に私は機能主義の實現、即ち各機能に應ずる各部分社會の成立を以て用役と要求との相比例する姿と解釋したのである。

然らば分離による破壊の離易と云ふ消極的標準によりて測定する時、全體社會の團結は如何なる事情の下に其團結鞏固なることを得るか。嘗て他の機會に於て述べたるが如く、全體社會を構成する結合に二種のものがある、其一は統一的團結即ち狹義の社會をなす團結である、其二は非統一的又は個人的團結である。前者にありては一の中に複數あり。後者にありては複數の中に一が

社會の團結の減衰

19) *ibid.*, p. 313.

20) *ibid.*, p.250; Cole, *Social Theory*, p. 47et seq.

ある。此二種の團結のそれと、又は相互の種々なる組合せによりて全體社會の結合は或は強くもなり或は弱くもなる。此組合せが至大の意義を有するが故に、部分社會又は個人的結合そのもの、弛緩或は緊密は全體社會の團結の上に直接なる影響を有し得ざる譯である。他の事情にして一樣ならばと云ふ條件の下に議論を進める。一の統一的團結の中に一切の結合が集中せらるゝか、出來得る限り多數の統一的團結非統一的團結の間に結合が分散せしめらるゝ時、全體社會の團結は共に緊密である。而して文化の發達は全體社會を此一極限より他の極限に追はむとするものと考えられる。

注目すべきは統一的團結たる部分社會の分化、從ひて其錯綜である。この分化が極めて低き程度に於て止まる時、即ち社會が少數の部分社會に分立する場合に於ては各社會の團結も割合に密に、それだけ相互間の分裂の危険も亦大なりと見なければならぬ。たゞ部分社會が各方面に亘りて無數に成立し相交叉するに及べば、全體社會が二三の部分社會間の分離反目によりて分裂し去るが如き事が無い。嘗て述べたる堆環的結合は十分に全體の統一を保證し得るのである。マクドゥガルは明に此點を説明して居る。其所見によれば、『集團感情は動もすれば類似の組織を有する集團に對する競争、反對の態度を促さむとする。然れども人は數多の集團が其性質及び目的により必然的に相争はざる限り、一以上の集團の自我意識に與る。吾人の複雑なる現代社會に於て

各人に於ける多數の集團意識の原理は甚だ重要なるものである。若しこれなくば、而して職業以外に集團を形成すべき自然的條件にして存せざるか又は割合に乏しき時には、全人口は職業團體に分裂し、各團體は出来るだけ多くの生活上の利益を得むとして團體的に相争ふであらう』<sup>21)</sup>事實に於てかゝる傾向が認められるのであるけれども、多數の部分社會の錯綜がよくかゝる危険を防止して居る。私は進みて思ふに、かゝる社會の數は減少するほど全體社會の統一を困難ならしめる、若し減少するにせばたゞ一の社會のみが存し、而してそれが全體社會の全成員を包括すれば一切の分裂の危険が除去られる譯である。國家が往々にして他の一切の部分社會を禁壓し消滅せしめむとする政策をとるのは重にかゝる事情による。少數なる部分社會の存在が全體社會の統一を妨ぐる事は此部分社會が一般の場合に於けるが如く、社會の一部分の成員のみを包括せずして各皆全成員を包括する場合に於ても亦然り。各皆全成員を包括しながら而も別々の部分社會として成立する以上それぞれ組織の中心を異にする。生活の各方面の自律的作用により分立する部分社會が自ら相對抗する勢を有し、加へて此組織の中心たる人々を異にする以上、社會の重心を一方の部分社會に置かむとして、所謂部分社會の全體社會の支配の爲の争を生ずる傾がある。國家對社會の紛争の如きは著しき例である。ギルドンシアリズムに於ける國家と全國的ギルドとの間にすらかゝる關係の成立が思はれる。全體社會の統一に對する此の如き妨げはこれらの部分社會以外

21) Cole, op.cit. p.50.

數多の部分社會を成立せしめ交錯せしめる事によりて免れらるゝ様に思ふ。而して部分社會の分化錯綜と云ふ事實さへあれば全體社會の統一は得らるべく、それは必ずしも機能主義の實現を俟たぬと思ふ。コオルによれば、各部分社會が之に相應する機能を營み、且つ此等の機能の中心たる各目的が社會の爲に必要にして補充的のものなる限り、數多の結社の錯綜から一の "coherent society" が出來上り、從ひて全體社會に調和がある。然らずして數多の結社が自らに應ずる機能をのみ營ます、本來の機能より脱逸し他の範圍を侵奪する時に結社の錯綜は調和ある全體を形成し難い。<sup>21)</sup> 然れども、私は思ふ、部分社會の分化さへ進めば、各社會の機能は如何様のものにも自ら其間から全體社會の統一が形成せらるべく、各社會の機能が其固有のものなりや、又之に本來相應するものなりやは第二次的意義を有するに過ぎず、相應すると否とを區別すべき標準も考へ得られぬ。

最後に個人的結合に一瞥を投ずる。個人的結合はそれが統一的團結に吸收せられて全然存在せざるか、それが無限に擴充せられたる時に全體社會の統一は確保せられる。例へば氏族が一切の人格を吸収したと云ふ程に、緊密の團結を形成したる時、進みて各個人間に個人としての結合なくたゞ氏族の成員としての交渉のみが行はれたりと假定せよ。此時にありては、全體社會の調和を威嚇すべき何ものも無い。然れども更に轉じて、個人的結合が統一的團結を離れて成立すとし

ても、その間の紐帯が極めて力弱きものとなり、同時に極度までに多數の人々の間に錯綜する事となれば、全體社會の統一が此個人的結合によりて破らるゝ危険が無い。吾人の經濟生活の安固が危険の分散により得らるゝ如く、結合の分散はまた危険の分散として結合生活の安固を保證する。然らずして、此個人的結合が情人の間に於ける如く、又生命を以て相許す狹客の親子分間に於けるが如くに成立せよ、全體社會の統一は此結合の相手が共に他の社會より離るゝ傾向ある限り、危くせらるゝのを見る。文化の發達、社會密度の増加は人々の個人的結合の網を無限に増加し錯綜せしめ、而も其網は極めて一面的となる、これ實に部分社會の分化と相伴へる過程にして、而して全體社會の統一の爲に同様なる方向に向ひて作用する。加之、部分社會の錯綜が堆環的結合として全體社會の團結に寄與する事は既に之を述べるが、此個人的結合も亦其發達の極度に於ては、それ自體相錯綜しゆくのみならず、其一面的なるほど、地域的に血縁的に、階級的に又職業的に遠き距離の人々を相結び其結果はまた、相分立して交渉乏しき部分社會を縫ひ付けて全體社會の團結に寄與する事をも考へ得る。

此の如く統一的團結に就いて見れば、部分社會の分化の極度に進むほど、又は部分社會の極度に小數なるほど全體社會の團結が確保せられ、個人的結合に就いて見れば又それが極限までに縮少して皆無に近きか、然らずば極度に發達して無限の錯綜を許すほど、全體社會の結束が加へられる。成員の同質的にして而も小數なるほど、云はゞ社會の低級にして文化の發達未だしく社會

的密度の稀薄なるほど、部分社會は少數にして又個人的結合は統一的團結の中に吸収せられる。これ例へば氏族の如き社會にありて、全體社會の統一が安固なるを得たる所以である。文化の發達に伴ひて此原始的狀態は破壊せられる。而も社會の人口大にして成員の異質なるものを全體社會に結束し上げる事情が相伴ひて生ずる。即ち個人的結合は結束の紐帶の一方的なり且つ廣き距離に亘り得る結果として縱横に錯綜する、部分社會の分化も亦愈進む。かくて、全體社會の團結はかの其部分社會の團結が愈弛緩するに拘はらず、依然として保持せらるゝ事を得るのである。勿論現代に於ても、此種々なる結合の網の交錯が十分に行はれたり云ふのでは無い、然れども、部分社會及び個人的結合の進み行きがかゝる方向に向ひつゝあるが故に、文化の發達の爲に全體社會の團結が破壊せらるゝ事無かるべしとは十分に主張し得る。加之、此全體社會の範圍が刻々に擴張せられ、遂には部分的全體社會例へば國民間の障壁の愈消滅に近づく事すらも期待し得る。たゞ全體社會の團結が文化の發達と共に愈加はり來るや又は減じ來るやと云ふ點に關しては、未だ何等の斷定をも下し得ざるを憾む。從來その増進を説きたるものはある。而も檢し來るに何等十分の積極的論據あるに非ず、道德的理想の事實に於ける投射に過ぎない。これは道德の進歩非進歩の問題に於けると同じく、永久に未解決の問題として留まるべきものではなからうか。(註二)

(註二) 部分社會の錯綜之しく、個人的結合の分散乏しき時に於ける全體社會の統一は重に特定なる一部分社會(例へば國家の如き)の強制的なる優勢によりて維持せらるゝ事を多しとするが、今此點に關する考察を後日に譲る。(一九二一、一一、六、午、前稿了)。